

## 言語、文化、連携：LEAP専門官が横田で研修 *Language, culture, and connection: LEAP scholars train at Yokota*

June 12, 2025

By Staff Sgt. Manuel G. Zamora  
374th Airlift Wing Public Affairs

このほど、語学要員空兵プログラム(LEAP)の専門官たちが、3週間にわたって第374空輸航空団のさまざまな部隊を訪れ、文化理解と言語スキルを活かし、インド太平洋地域におけるパートナーシップの強化と任務遂行力の向上に取り組んだ。

参加した専門官たちは、特に日本語をはじめとする多言語に堪能で、今回の実地研修は、機動的戦闘展開(ACE)を支援し、パートナー部隊との相互運用性を向上することを目的に行われた。

第69爆撃機中隊B-52Hストラトフォートレスのパイロットで、LEAP専門官も務めるシンリュウ・アオヤマ大尉は、次のように述べた。「この研修は、単に言葉を訳すだけのものではない。大事なものは、文脈や文化を理解し、それがどう任務に影響を与えるかを知ることだ」

LEAP専門官たちは第374整備中隊や装備即応中隊などの部隊を訪れた。運用の現場を見学しながら、文化的な壁となりうる要因を見極め、現場で活かせるコミュニケーションの方法を実践した。そして一同は、元LEAP専門官である第374運用群の上級下士官主任クリストファー・レイス最上級曹長によるACEに特化した講義も受講した。

レイス最上級曹長は、「LEAPは、ACEを体現する存在だ。自身の専門分野に精通しているだけでなく、言語や異文化理解という強みを持ち、必要なときに柔軟に対応し、人と組織をつなぐ架け橋となってくれる」と話す。

さらにレイス最上級曹長は、ACEは単なる機動力や分散的運用にとどまらず、異文化環境でも効果的に活動できる空兵を育成することにあると強調した。

今回の研修の参加者で、クラスリーダーを務めた国防情報局の開発技術官セオドア・シリッグ中佐は、語学の向上と作戦理解が融合した効果的なプログラムだったと振り返る。

シリッグ中佐は、「調整官は、翻訳と通訳の違いや、実戦的なACEの考え方を語学教育にうまく組み合わせしてくれた。今後の課題は、語彙力のさらなる強化だ。日本語は非常に奥が深く、繊細な表現が求められる言語なので、流暢さを高めることが共同作戦を支える力となる」と述べた。

NATOでは、英語が軍事上広く使われている一方で、インド太平洋地域の運用には、より高度な文化理解と語学力が求められる。

空軍がこの地域におけるパートナーシップを深めていく中で、LEAPは、空兵が多様な現場で即応でき、文化的背景を踏まえてリーダーシップを発揮できるよう支えている。

第5空軍副司令官ジョン・シュッテ准将は、「語学力は、空軍だけでなく同盟全体にとっても極めて重要である。リアルタイムでの情報共有ができれば、即応力や行動力が向上する。言語のみで戦争に勝てるわけではないが、勝つために必要なすべて——計画、相互運用性、信頼、任務の遂行——を支えるのが言語である」と語る。

